

Title	学会抄録 第52回日本泌尿器科学会中部総会「男性不妊症臨床の現況と展望：泌尿器科医の役割」
Author(s)	松田, 公志; 布施, 秀樹
Citation	泌尿器科紀要 (2004), 50(8): 539-540
Issue Date	2004-08
URL	http://hdl.handle.net/2433/113431
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

第52回日本泌尿器科学会中部総会

「男性不妊症臨床の現況と展望：泌尿器科医の役割」

—司会の言葉—

関西医科大学泌尿器科

松田 公志

富山医科薬科大学泌尿器科

布施 秀樹

結婚年齢の高齢化と夫婦当たりの子供の数の減少は、出生人口の急速な低下を招きつつあり、近い将来大きな社会問題になると予想されている。不妊症臨床の社会的意義は以前にまして高くなっているといえよう。一方、不妊症に対する治療は、卵細胞質内精子注入法などの補助生殖技術の開発と普及によって大きく進歩し、これまで挙児の希望がなかった夫婦でも妊娠出産が可能となった。一方で、「不妊症のすべてが補助生殖技術で治療できる」、「男性不妊症の治療はもはや必要ない」との風潮が生まれつつある。補助生殖技術の劇的な治療成果に比べて、男性不妊症に対する根本的治療の効果は不安定で有効率も必ずしも高くなかったことも、男性不妊症診療がややもすれば軽視されてきた一因とも言える。すなわち男性不妊症の多くを占める原因不明のいわゆる特発性造精機能障害の治療成績は、原因療法でないこともあって、内分泌、非内分泌療法いずれも必ずしも芳しいとはいえなかったのも事実である。一方外科的治療により一定の効果が期待される精索静脈瘤や閉塞性無精子症などにおいても、その適応や選択する術式、手術の習熟度などの施設間の違いもあり、全体としての奏効率は必ずしも満足できるものではなかった。しかし、手術手技の向上や病態の解明によって、男性不妊症臨床も大きな成果を挙げてきている。これらの最近の進歩を理解し、子供を希望する不妊夫婦を適切に診療することは、われわれ泌尿器科医の責務といえよう。

2002年11月14日～16日に名古屋市で深津会長のもとに開催された第52回日本泌尿器科学会中部総会では、「男性不妊症臨床の現況と展望：泌尿器科医の役割」と題したシンポジウムが企画され、男性不妊症臨床のさまざまな側面について最新の知見を発表していただいた。

大阪大学泌尿器科の松宮清美先生は、「男性不妊症に対する新しい内分泌治療」として、GnRH analog療法を提唱された。本研究では、特発性正ゴナドトロピン性乏無力精子症患者を対象に、GnRH analog とクエン酸クロミフェンとの前向き無作為割付試験の結

果、GnRH analog 群においてのみ精子濃度と運動率が有意に改善したことが示されている。対象を適切に選択すれば、短期作用型 GnRH analog の少量投与が特発性男性不妊症に対する新しい内分泌治療として有望と考えられる。

「特発性造精機能障害に対する漢方療法」について、富山医科薬科大学泌尿器科の古谷雄三先生は、漢方の証に応じた薬剤の選択が必要なこと、虚証の患者で補中益気湯によって精子濃度と運動率が有意に改善したこと、精漿中 sFAS 濃度も上昇し、さらに精子濃度と関連したことから何らかの関連が想定されることを示された。特発性造精機能障害の原因が不明の現状で、漢方療法も大いに期待される分野であるが、徐々に科学的な立証がなされつつあることが理解できた。

京都大学泌尿器科の大久保和俊先生と西山博之先生は、「精索静脈瘤の手術適応について」現在の考え方を、自らのデータをもとに示された。精索静脈瘤手術を受けた148例において、術後自然妊娠率は25.7%、自然妊娠に影響をおよぼす因子としては術前精子運動率10%以上かつFSH値20IU/L未満が提唱された。精索静脈瘤手術の不妊症治療としての有用性に疑問を投げかける報告が散見される今日、データに裏付けられた対象症例の選択は重要なテーマと考えられる。

関西医科大学泌尿器科の六車光英先生は、「閉塞性無精子症の診断と治療」について、現在のスタンダードな考え方を解説した。施設での精管精管吻合術や精巣上体精管吻合術の治療成績は比較的良好であるが、補助生殖技術の普及とともに、最近10年間に対象患者数が激減している。精巣精子を用いた顕微受精と精路再建術のいずれを選択すべきか、補助生殖医療担当者をも交えて意見の交換が必要と思われる。

さらに、将来の展望として、名古屋市立大学泌尿器科佐々木昌一先生に、「宇宙での男子妊孕性」について、これまでの基礎的研究成果をご報告いただいた。微少重力環境での実験で、精巣萎縮や血清テストステロンの低下、精子運動能の低下などが認められ、さらに体外受精卵の発育にも影響が生じうることが示され

た。未来を見据えた実験として興味深い報告であった。

今回、泌尿器科紀要編集部のご協力をえて、シンポジウムの成果を論文としてまとめていただいたのは、司会者として望外の喜びである。ご尽力いただいた京都大学泌尿器科山本新吾先生ほか泌尿器科紀要編集部各位に心からお礼申し上げたい。男性不妊症臨床の現

状と将来の展望について、その道のエキスパートによって最新の知見がまとめられた本特集は、男性不妊症を専門とする泌尿器科医だけでなく、一般泌尿器科医にとっても役立つものと確信している。

(Received on June 3, 2004)
(Accepted on June 9, 2004)